

C. 研究結果

現時点においてはレトロスペクティブな検討により非代償性肝硬変における抗ウイルス療法の有効性を検討した。平成16年から20年まで当院にて加療したB型非代償性肝硬変症例11例(男性8例,女性3例,平均年齢 53.4 ± 8.8 歳)。抗ウイルス剤はラミブジン4例,エンテカビル7例を使用し,2例は経過中のbreak through hepatitisのためアデホビルを併用した。慢性肝炎急性増悪による肝不全は今回の検討では除外している。今回の平均使用期間は24ヶ月(4-55ヶ月)である。開始時に全例中等度以上の腹水があり,肝性脳症の併発は1例に認めた。投与時において肝癌合併は5例認めている。投与開始時(平均)はAlb 2.8g/dl, PT 49%, T.Bili 5.5mg/dl, AST 268.0IU/dl, ALT 273.0IU/dl, plt 5.1万/ μ l, HBV-DNA 6.0Log copy/ml, HBe抗原陽性例は4例, HBe抗体陽性例5例であり, genotype Cを5例に認めた。肝予備能の評価としては全例Child-Pugh C, 平均10.8点(10-13点)であった。投与開始6ヶ月後を効果判定とし, 検討すると, 1例の死亡(門脈血栓合併の肝不全死)を認めているが, 投与6ヶ月での治療効果(平均)はAlb 3.1g/dl, PT 58.0%, T.Bili 3.2mg/dl, AST 53.3IU/dl, ALT 35.9IU/dl, plt 6.6万/ μ l, HBV-DNA 3.7Log copy/ml, Child-Pughスコアは平均7.8点へと改善を認めている。Child-Pughスコアの改善はおもに腹水の消失と, 黄疸の改善が寄与していると考えられた。その他のデータでは有意差は得られなかった平成20年12月までの最終転帰の検討では6例生存し, 5例の死亡を認めている。そのうち4例はコントロール不良の肝癌死であった。生存例のうち腹水は7例で消失し1例は投与1年以上にもかかわらず現在も残存している。

D. 考察

- (1) 今回までに集積されている症例においては, 抗ウイルス療法による副作用を初めとした問題は認められず, 非代償性肝硬変症例においても安全に投与できることが確認された。
- (2) すべての投与症例においてウイルスは基準以下まで改善しており, 抗ウイルス効果は慢性肝炎と比し遜色はなかった。
- (3) 今回の検討では6例の生存例のうち5例に改善を認めたものの, 1例が無効であった。現時点では症例の蓄積が少ないために有効性の差異の検討は難しいと考えられたが, ヒアルロン酸など若干高値であり肝硬変の組織的進行度が一つの因子と考えられた。

E. 結論

症例数が少ない検討ではあるが, 非代償性肝硬変においても抗ウイルス療法は安全かつ有効であると考えられた。

F. 健康危険情報

特記すべきことなし。

G. 研究発表

1. 論文発表
別紙参照

H. 知的財産権の出願・登録状況

今回の研究内容については特になし。

